

「五農 GROW UP PROJECT」

～農業高校の魅力を地域の方に伝えていくために

「産・官・学・民」との連携をどのようにしていくべきか～

クラブ員代表者会議 東北ブロック 青森県立五所川原農林高等学校
 生物生産科 3年 伊藤 旭飛
 生物生産科 3年 泉谷 七渚
 食品科学科 3年 山本 真羽

1 はじめに



今年度、本校は創立120周年を迎えます。西北に暮らす人々を農業でつなぎ、産業と教育を融合させた学校、それが五所川原農林高校です。本校のある五所川原市は、田園風景が広がり農業を基幹産業とする地域です。

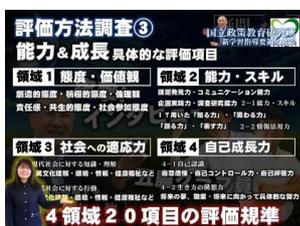


ただ、15年で約1600件、40%の農家が姿を消しました。超高齢化が進行する中で、農業に魅力を持ち継承する若者が緊急の課題となっています。

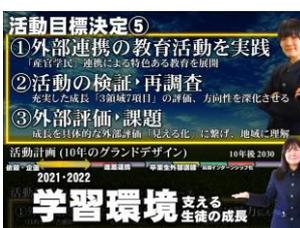
2 テーマの分析、目指すべき成長の姿、活動の目標設定



テーマを整理するために、定例会を開きました。話し合いでは「地域」というワードに注目。さらに、魅力を定義するために、アンケートを実施しました。その結果、「基幹産業を支える能力が備わっている」こと、「生徒の成長が実感できる」ことの2つが魅力に直結する回答を得られたことです。ただ、普段の学習の他に、なぜ外部との連携が必要なのかと疑問に思いました。そこで、「能力」と「成長」の評価方法を調べました。すると、能力や成長は、



4つの領域に分けられ20項目にわたり評価されました。授業・部活動により成長する項目が13項目、他の7項目は外部機関との連携により、成長させる必要性に気づいたことです。そこで、連携を経営方針に位置付けることを提案です。重点要望事項に加え、授業内の活動として実践でき、成長を評価できるようにしました。



活動目標を、1：外部と連携した活動を実践。2：活動の検証と調査。3：外部評価と課題に設定することにしました。ゴール地点を10年後とし、現在は2～3年目、成長できる環境



づくりを目標とします。「五農グロウアッププロジェクト」を立ち上げました。活動は、「3領域・7項目」にターゲットを絞り、3つのチームを結成しました。

3 「産・官・学・民」連携活動1



まず、生産技術を学ぶ活動です。ICTの可能性を学ぶことを目的に、みちのくクボタ・ヤンマーアグリジャパンと協力し、大規模経営の学習です。収量のデータを、クラウド上で共有し、施肥設計に繋げる可変施肥田植機の実演・講習会を行いました。次は、社会性を高める活動です。遊休農地の活用を目的に、県民局と連携した整備事業です。西目屋村のモデル実証林に、「うるし」を植林する活動で、高校生が関わるのは県内初の取り組みです。続いて、生き方や地域貢献活動です。進路選択を目的に、県測量設計協会を講師に招き、学習会を開催しました。レーザースキャナーで、GPSを用いた電子平板を操作するなど、最新技術を体験できました。



参加した生徒は、「近い将来、産業を支える重要な技術を学べた」と、関心を高め、学習の動機づけに成功です。その他、各学科が課題研究を活用して、外部機関と連携した活動を展開し沢山の成果をあげています。

4 クラブ員活動の再計画1、「産・官・学・民」連携活動2



クラブ員から、「領域を関連させた成長も大切ではないか」との意見があり、活動を再計画です。そして、「スキル・ソーシャルチーム」がタッグを組み、国際水準の管理を普及させたいと考え、GLOBAL・GAP 認証の推進です。ティフズードジャパンと県農林水産部が本校の認証をバックアップ。将来の後継者が正しい理念を持つことを目的に、安心・安全な実習環境を整えました。



さらに、「ソーシャル・ヒューマンチーム」が連携した、FSC 認証です。本県は、世界自然遺産の白神山地や、多様な樹種を誇る有数の森林県です。そこで、全国に先駆けて森林管理認証を取り入れました。本校の実習林を、世界基準に照らし合わせた適正な管理に改善し、100年後を見据えた教育を実践しています。地域からは、「認証を通して、世界基準を理解させる取組が素晴らしい。」と本校に対する見方を変えるきっかけになりました。グローバルな視点を取り入れた認証教育は、魅力的な教育環境であり、全国からも注目されています。

5 目指すべき姿(成長)に近づけているか校内アンケート

(認識的評価〔精神的評価〕)集計分析、クラブ員活動の再計画2



クラブ員に、成長の実感をアンケート。すると、すべての項目で高い数値が得られ、成長の可視化に成功です。地域メディアにも多数取り上げられ、魅力を伝える機会となりました。ただ、クラブ員から、「構想力」が比較的低いことを指摘されました。ショックでしたが、理由を確認すると、「技術は学べているが、学びたい意思を汲み取れていない」ことが明らかとなったのです。クラブ員の「主体性」を伸ばすことが、更なる魅力につながると考えることができました。

そこで、学びたい内容を再調査です。すると、前向きな回答が得られ、次年度に生かしてもらう取組を行いました。

6 「産・官・学・民」連携活動3



今年度、「運転誤差が少なく最新のGPS精度を学びたい」という要求に世界中の衛星情報による、測位精度を高めた密苗栽培講習会の実現です。施設・資材費を大幅にコストカットでき、KSAモデルを導入した取り組みは全国初の取り組みとして注目されています。次は、「伐採後の活用まで考えたい」意見を県に要望です。すると、国宝や重要文化財の修理に「津軽うるし」を活用することが決定し、地域資源の価値を高めました。更に、「GAP教育を広めたい」と思い、柏木農業高校と連携し、全国農業高校との情報交換会を開催しました。GAP記念日の9月16日に行い、「コロナ禍でも、充実した交流ができた」と地域間の問題を共有できました。加えて、120周年に合わせてGAP米を活用した「五農味しらべ」のパッケージは生徒自らが考案です。

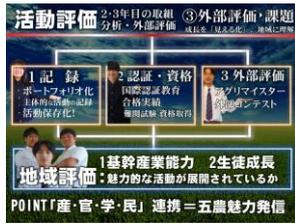
クラブ員は、連携によって想像力を生み出し、成長を実感できる姿へと変化しました。

7 主体性の変化により、発想力が開花し、地域を考え行動する姿勢へ

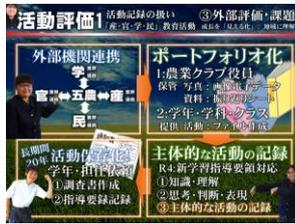


主体性が芽生える中で、「子供の貧困問題と向き合いたい」と発言するクラブ員が現れました。見えない貧困と向きあう、フードバンク事業に挑戦です。高校初の団体として、弘前大学・県の協力を得て、子供食堂団体とコラボ活動が実現です。収穫体験の他に、「ここまる in 五農」といった食育イベントも開催しました。食材の提供だけでなく、社会福祉の充実も図る活動は、モデル的な取組として全国に紹介されました。担当した生徒は、「7人に1人が貧困状態にある。農業と福祉をつなげる活動を、これからも続けたい」と、地域将来を見つめる姿勢が、着実に育っています。

8 連携活動の評価(記録・数値的評価〔物理的評価〕)



最後に活動の評価です。私たちは、生徒の成長を確認できるよう、「記録」「資格」「外部評価」の3つに分けて、それをもとに地域アンケートを行いました。



1つ目の「記録」では、ポートフォリオを、「主体的な活動の記録」として記載してもらうことを依頼です。調査書や指導要録へ記載されることで活動を長期間残すことに繋がります。2つ目は、進路に直結する「認証・資格取得」です。認証教育は、全国最多の継続です。次に、環境土木科では、3カ年の測量士補試験の合格者は過去最多を更新、進路面でも国家公務員等の合格者も過去最高を記録しました。3つ目の「外部評価」です。アグリマイスターでは年々取得者が増加し、78名の認定は過去最多で全国1位となりました。高校生ボランティアアワードでは、全国の上位16校に選出。高校生SDGSアイデアコンテストでは、日本一にあたる最優秀賞を受賞しました。



最後は地域評価です。保護者・学校評議員・地域を対象にアンケートを実施しました。「生徒が生き生きと活動している」「学校の活動で成長している」などの回答を頂き、数値も高く魅力が伝わり大成功です。



9 活動のまとめ、今後の課題



まとめです。目的に応じた外部連携により、生徒達は成長を遂げ、積極的に活動する主体性を伸ばすことに成功です。そして、地域企業・住民からも評価され、魅力的な学習環境をつくることができました。来年度は、評価基準に連携活動を加えてもらい、成長を支援すること。スマート教育のプラットフォームを五農が創り上げることを課題に取り組みます。



10 最後に



挑戦は始まったばかりです。いつの時代も、人の魅力が地域の力となり、私たちの将来を支えます。五農で創る未来を信じて、これからも頑張っていくことを誓い、発表を終わります。